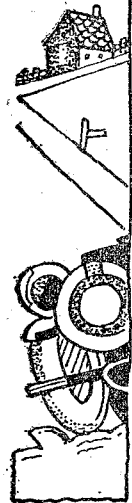


通信

# 南獨十日の旅



宮崎正夫

第七回萬國道路會議のプログラムの一であり、會議參列者の最期待して居た視察旅行は、九月六日、七日の兩日はミュンヘンから日歸りで獨逸國境所謂バイエルアルプス方面へ、同九日からは十日間の行程で五班に別れて國內各方面を自動車で廻遊したのであつた。私が選んだのはミュンヘンより瑞西國境コンスカンス湖に出で、ライン河に沿うて北行フライブルグ、バーデン、スツツトガルト、ハイデルベルヒ、フランクフルト、ウイースバーデン、マールブルグ、カツセル、アイゼンナツハ經由ベルリン歸着のコースで自動車を驅つた距離實に二千籽、獨逸南部一帯の主要

都市を歴訪したのであつた。局部的に碎石道路を見ぬでは無かつたが、殆ど大部分は鋪裝せられ、五・五米乃至八・〇米の幅員を有して居る。鋪裝の種類は雜多ではあるがアスファルト系統六、七割其他は石塊、コンクリート等である。一般に地質は堅牢であつて改良工事中の處を見ると鶴嘴で相當の厚を一樣に鋤き取り割栗を並べて丁寧に路盤工を施して居る。此邊融通のきかぬ國民性を表して居る様でもあるが、一面失敗のない手堅い工法とも思はれた。モーターリストの多い國柄に依るのもあらうが道路の標識が極めて親切である事丈けは感心させられた。其他には特殊の

印象を興ふる何者も見出し得なかつたので其の代りに負しい、慌しい私の旅行日記から拾ひ書をして見たい。

九月五、六兩日、ミュンヘンよりバイエルンの野をドライブして工事中の自動車専用道路及アルプス道路を見る、ライヘンハル、ガミツシュ等の國境近い部落はバイエルアルペンの峻しい山裾に當り、岩肌をむき出して居る山々の隈は雪既に白く日に映え、山麓の湖水は晴れた秋空をひたして幽寂な避暑地であり、ウインタースポーツの中心地である。絶好の秋晴に恵まれ兩日共夜に入りミュンヘンに歸着した。

水の如き夕靄低く野を覆めて

灯影も淡しバイエルンの郷き

九月九日ミュンヘンより自動車十日の旅に出で立つ。沿道林檎畑打ちつゞきて道の上に蔽ひ茂り、たわむに實る赤い實が時折自動車に觸れてオープンカーの内へ落ちて來るのを皮ごと嚼るのも一興であつた。其夜はオーベルスドルフ宿り。

十日、ボーデンゼー（コンスタンス湖）を越えフリードリツヒスハーフェンへ。暫く續いた好晴も今日は雨となり此邊では稀な豪雨とて、牧場は水に浸り、小河は赤く濁つて氾濫して居る。雨中目下建造中のツエツベリン飛行船並に工場を視察する。

十一日、フリードリツヒスハーフェンより自動車のフェリーにて再びボーデンゼーを越え瑞西領コンスタンツへ、此湖水は獨、塊、瑞三國に跨り晴れたらば峻峻一萬尺の雪嶺の眺め美しかつたであらうものを惜しくも朝靄に霞んで展望を縦になし得なかつた。

漣もあるかなきかの水を越え

國をも越えて鷗飛ぶなり

ボーデンゼーより流れ出づるラインの水源は、自然の大貯水池を擁し、豊かな水量を湛へて瑞西領内を流れ、ライス瀑布を形成する。瀑の下流に立てば、飛沫町餘の周圍に騰り、奔流白く河幅を堰いて壯觀である。

時ならぬに霧捲き朝の陽はうすれ

ラインの流湧きて落ちゆく

其夜フライブルグ丘上の公園にて市長より夜宴に招せらる。此處はヴェルテンベルヒの密林地方の中心地であり且は葡萄の産地である。

森の都酒の都のうたげなり

夜暗らうして歡聲の湧く

十二日朝、鬱林晝猶暗き森の國所謂シユワルツワルドよりバーデンへ入る。

幾山河今日も越えなん酒によし

森緑濃きバーデンの里

いで湯の町バーデンは療養場であり、遊樂地であり、且は歡樂郷である。夜バーデン州總督の饗宴に列する、然し起きるから寝る迄窮屈な身なりをしてバスに沈む丈けでは湯の町の寛いだ気分は微塵も浮んで來ない。

故國のいで湯戀ふれば湯の町の

うたげの酒も今宵なづまず

十三日、バーデンにて一行と別れて汽車にてフリードリ

ツヒスハーフェンへ逆行する。

十四日、未明コンスタンス湖畔フリードリツヒスハーフェンにて各國代表約二十名ツエツペリン飛行船に塔乗フランクフルトアマイン迄約四時間空より南獨逸を——特に現在工事中の自動車専用道路を視察する、黎明の地上、點綴せる都市を高度一千尺の飛行船の脚光に照らし、やがて東雪の湧騰する山々の峰越えて旭光横さまに我等の飛行船を宇宙に照らせば尢大なる船體の影は長く、遠く、遙か彼方の野に森に落ちてぐんぐんと翔り行く。

現在唯一の、嘗ては我國にも足跡を痕した飛行船であつて當時のエツケナー博士は老體を以て依然司令官として指揮に當つて居る、此飛行船により現在獨逸より南米迄を三日にて翔破する定期航空路も開かれて居る。

我々特に本大會委員長トツド博士より招待を受けた二十名は一躍フランクフルト迄飛んだので、視察旅行のプログラム通りならば一夜を過すべきアルトハイデルベルヒは空から見て通り過ぎたのであつた。ネツカー河畔の古城、ゆ

かしき其名を聞く事久し。幸ひフランクフルトの着陸場へは朝八時半に着いたので、視察團の一行と明日此地に落ち合ふ迄充分の餘裕があるから汽車でハイデルベルヒに引き返し古城を訪ふ。秋空高く晴れて行くとして、見るとして清涼の氣充ち満て居る日であつた。

燦々と日は輝けと城廓の

石に染みけむ秋の冷けさ

日本の生んだ名曲「荒城の月」を此清夜獨座聞くならば唯さえ感傷的になり易い旅心を、そゝる斷腸の思あるであらう、心惹かれ乍らも灯赤きフランクフルトへ歸る。

月今宵古城に冴えん時待たば

旅の惹に堪ゆるべきかは

十五日朝、マイン河畔を逍遙する。美しい水ではないが河畔のプラタナスの並木を漏る秋の日ざしには清爽の氣が溢れて居る。

プラタナスの茂みに朝の風戦ぎ

マインの流秋さやかなり

フランクフルト市主催の午餐會にて一行と合し再び我等の旅は續く。此附近自動車専用道路の工事略完成せる箇所を視て、ライン河畔マインツより、湯の町ウイースバーデンへ。

十日に亘る自動車旅行も此邊が時にて、其後はチューリッゲンの野を越へ、山を越へ平々坦々なる車窓、一圖にベルリンのネオンサイン戀しく、車内の談笑も前程賑かで無くなり、マールブルグ、カッセル、アイゼナツハ、等中部獨逸の都會を経て、其月十八日の夕刻ベルリンへ歸る。其夜はベルリン市長の招宴、翌十九日午後閉會式を擧げ外相の長廣舌の言葉の分らぬ悲しさに馬の耳に念佛と聞き流し其直後宣傳大臣ゲツベルスの御茶の會に招待せられ、茲に道路會議一切の順序を終つたのである。

散漫に書き列ねた私の道路會議の記事も此邊で一段落としたい。